

作物名：トマト

病害虫名：トマト黄化葉巻病（病原：*Tomato yellow leaf curl virus* , (TYLCV)）

1 被害の特徴と診断のポイント

- 生長点付近の葉色が淡くなり、葉の周縁部が退緑しながら葉巻症状となり、葉脈間が黄化し縮葉となる。
- 病勢が進展すると、生長点が萎縮して成長が止まり、発病後はほとんど着果しなくなる。結実した場合でも果実の肥大に影響が出るとされる。
- 幼苗期に感染すると枯死することがある。

2 伝染源・伝染方法

- ウイルスはタバココナジラミの吸汁によって媒介される。
- 本病に罹病したトマトをタバココナジラミが吸汁することでウイルスを保毒し、保毒した虫が別のトマトを吸汁することで感染が広がる。
- 一度保毒したタバココナジラミは死ぬまで伝搬能力を持つ（永続伝搬）。
- 保毒したタバココナジラミのウイルス経卵伝染、種子伝染、土壌伝染、管理作業による汁液伝染はないとされている。接木では伝染する。

3 発病しやすい条件

- タバココナジラミは低密度でもウイルスを媒介するので、施設内への侵入防止と防除を徹底する。
- タバココナジラミの発生が増加する初夏から初秋までの時期に、トマトが育苗～定植する作型で発病が多い。
- 高温時は感染して2週間程度で発病する。低温時は発病まで時間がかかる。
- 本病が発生した地域でトマトが周年栽培されると、保毒虫が途切れず発生しやすいため本病が発生しやすい。

4 防除方法

- 黄化葉巻病にはイスラエル系統とマイルド系統がある。黄化葉巻病の系統とトマトの耐病性品種の抵抗性遺伝子型の組み合わせによっては発病することがあるので、品種選定の際は注意する。両方の系統に耐病性があっても高温時は発病することがある。
- 耐病性品種は、感染しても発病が見かけ上は抑えられ果実の収穫も可能になるが、ウイルスが植物体内で増殖するものがあり、結果としてウイルスの伝染源になるおそれがある。そのため、耐病性品種を栽培していてもタバココナジラミの防除は適切に行う。
- タバココナジラミの防除対策が本病の防除対策となる。本病はウイルス病のため、発病株に対する治療剤はない。
- タバココナジラミに対して、防虫ネット設置（0.4mm）等の物理的防除、施設内や施設周辺の除草等の耕種的防除および薬剤防除を行う。
- タバココナジラミの薬剤抵抗性の発達を防止するため、RAC コードの異なる薬剤を組み合わせ



写真1 葉の周辺の退緑症状



写真2 発病株

- せ、計画的なローテーション散布を行う。
- 育苗期から体系的な防除を行う。
 - 栽培期間中はほ場内をよく見回り、発病株を早期に発見次第抜き取り、ビニール袋等に入れて施設外に持ち出し、屋外で生育できないよう土中深くに埋設するなど適切に処分する。
 - 収穫終了後は、株を根元で切断し施設内を閉め切って蒸し込み処理を行う。トマト残渣は十分に乾燥させタバココナジラミを死滅させてから施設外へ搬出し、土中に埋めるか焼却などの適切な処理を行う。

5 出典

(1) 参考文献

- 農業総覧原色病虫害診断防除編2-①（農文協）
- 農業総覧原色病虫害防除・資材編2（農文協）

(2) 写真

- 宮城県病虫害防除所撮影

（令和8年3月作成）